

自分だけでは何であるかを知る事ができない。だが、心の奥底に、他者と分かち合うことを切望している現実がある。悲しみか、不安か、嘆きであるか、また、それとより越した畏れにも似た思いであるかは分からない。

大震災は、人々から故郷と生活のいしづえを奪った。失った者は、何が自分を支えていたかを知らされる。

人々の多くは、被災者であるとともに遺族でもある。家族、親族、友人、同僚の手が、これまでいかに強く、また見えないところで支えていたかを、痛みまで感じていくに違いない。

亡くなった人のためにも、生き残った者の手で、町を、来るべき将来を構築していくなくてはならない、がんばろう、そう言う者もあるかもしれない。事実であるようにも思えてくる。だが果たして、こころした掛け声が、悲嘆する人間に眠る力を呼び覚ますだろうか。彼らは慰められるこ

とを求めているのではないだろう。また、励まされることが必要なでもない。むしろ存在することだけに懸命な人間に、がんばってくださいと声を掛ける者は、それがいかに残酷な言葉であるか思い知らなくてはならない。人々

き、さらには夢の中でも、人々は死者たちの呼びかけを感じる。だが、自らの思いを言葉にしようとした途端、愛する者の姿は消えてしまう。死者は見えず、触れることはできない。しかし、死者はたしかに臨在する。「生ける

置き換えることもできる。《「存在論」は知識ではない。哀しみであり神秘である内なる「無限」を魂深く感受したとき、それは誰の意識にも懐しく知られているあの生活感情として甦る。たとえば私たちは言ってきたではな

ことができるだろうと池田は言う。文学とは、不可視な実在に、言葉の肉体を与えることである。それは大震災以前から変わらない。しかし、震災後はその遂行を、いっそう強く求められているように思えてならない。なかでも文学者——あるいは広義の芸術家に、今、急務として託されているのは、死者を実在として語り、生者と死者の協同する関係を明示すること、すなわち死者論である。

## 死者に対する

# 沈黙の言葉を

若松英輔

はすでに「がんばる」ことの方

海に向かって、がれきに向かって、あるいは、人知れず部屋で独り、彼らは死者に語りかける。また、道を歩くとき、あるいは仕事をしているとき、眠りにつこうとしたと

死者」であることを感じていく。そればかりか、死者たちが、困難を生きる自分たちと、いつも共にある協同する同伴者であり、その働きかけがなければ、今が無いことも感じているだろう。

いか。「あの人は死んだけれども、私のこころのなかで、いつまでも生きている」と。素直に、あるいは、最後に手に入れた結晶のような想いとして。そして、すでにない人にむけて、ことばを紡ぎ続けるではないか《「事象そのものへ！」》

池田は、こころも書いていく。《死者の思いを為し生者は生きている／死者に思われ生者は生きている／したがって、生存とはそのような物語なのである》（『リマーク 2007』）。死者のために生者が生きているのではない、むしろ、生者を支えているのが死者なのである。

池田晶子という哲学者がいる。四年前に亡くなったが、彼女はこう書いている。以下の文章中の「存在論」は、「存在の謎」、あるいは、生と死をめぐる存在の神秘、と

独り、死者に言葉する、そのとき人間は人生の秘密をかいまみる。それは探し求めてようやく「最後に手に入れた結晶のような」貴い想いである。どうしてそれを打ち消す

死者は生者の沈黙のうちに顕れる。死者との対話は沈黙の「言語」によって行われる。沈黙の言葉、この矛盾する表現が現実になるような空間を私たちは誰もみな、内に秘めている。それは昔から、多くの文明を通じて魂と呼ばれ、不死であることが繰り返され論じられてきた。今日、文学者の役割は「沈黙すること」ではなく、死者を思いながら《魂に沈黙を生む言葉》を発することではないだろうか。



わかまつ・えいすけ＝批評家 1968年生まれ。著書に『神秘の夜の旅』『井筒俊彦 叢知の哲学』。